幼児が生き生きと遊びこむための援助の工夫

――――戸外遊びを中心に――――

目　　次

Ⅰ　テーマ設定理由……1

Ⅱ　遊びの意義……2

1　遊びとは……2

2　遊びの分類……2

3　遊びの中から育つもの……2

4　戸外遊びで育つもの……3

Ⅲ　調査研究……4

家庭における幼児の遊びの実態調査と考察……4

Ⅳ　幼児が生き生きと遊びこむための教師の援助……6

1　教師の姿勢……6

2　教師の援助……6

Ⅴ　環境の見直し……7

1　園庭の環境の見直し……7

2　幼稚園環境構成図……9

3　園外保育マップ……10

Ⅵ　保育実践……11

1　事例研究……11

2　実践例……15

展開例……17

反省と考察……20

Ⅶ　研究の成果と今後の課題……21

主な参考文献……21

浦添市立神森幼稚園教諭

比　嘉　美智子

幼児が生き生きと遊びこむための援助の工夫

――――――戸外遊びを中心に――――――

浦添市立神森幼稚園教諭　**比　嘉　美智子**

Ⅰ　テーマ設定理由

子どもは，遊びを通して育つ，子どもの遊びは生活そのものであるといわれている。教師は生活の場である幼稚園が，魅力的な環境として子どもたちに捉えられ，幼児一人ひとりが意欲をもって環境にかかわり，幼稚園生活を思う存分楽しみ生き生きと遊びこんで欲しいと願っている。

幼稚園生活の中で，すべり台にホースで水を流し「波の上レジャープールごっこ」をする子。「忍者の修行だよ」と，友だち同士いろいろな忍法を考え出し忍者ごっこをしている子。「きょうは水遊びをするんだよ」と，登園するとゴムぞうりにはきかえて園庭に飛び出していく子など好きな遊びを楽しんでいる姿が見られる。

しかし，中には「ブロックしていい」「外に行ってもいい」「ブランコ乗ってもいい」など教師の承認を得ないと遊べない子。友だちの遊んでいるのを見ている子。遊びが転々としている子など，のびのびと遊べない子や遊びこめない子もいる。

何故，遊べない子がいるのか，何故，遊びこめない子がいるのかを考えてみると，きょうだい数の減少・ファミコン・テレビ・ビデオなどによる遊びの変化や，地域や家庭をとりまく環境の変化もひとつの要因として考えられるのではないだろうか。

また，私のこれまでの保育実践を振り返ってみると「一人ひとりの幼児が，生き生きと遊び自己充実して欲しい」と願いながらも，一人ひとりの育ちの見極めと充実を促すような環境の工夫や教師の援助が不十分だったと思われる。

子どもたちをとりまく社会環境や家庭環境が変化していく中で，せめて幼稚園の中では自由な雰囲気・時間・空間を保障してやりたいものである。幼稚園に来ると家庭にはない広い庭があり走りたくなるような空間がある。登りたくなるような木もある。太陽の下で季節の変化を肌で感じ，虫や草花など自然とかかわることで感性が育つ。物とかかわり友だちとかかわることで心身の発達も促される。発達の著しい幼児期に，戸外で充分遊びこむことが大切だと考える。

そこで，一人ひとりの幼児がより充実し，望ましい方向に成長していくためには，教師のかかわり方や援助はどうすればよいか，また，環境の工夫をどうすればよいかを，戸外遊びを中心に考えていきたい。

幼児の遊びが充実し，発展するための手だてとして

- 幼稚園における「遊び」を理解する。
- 一人ひとりの育ちを理解し，適切な援助をする。
- 環境の見直しをし，幼児と共につくりだす環境の工夫をする。

以上のことを実践研究することで，幼児が主体的に環境にかかわり，生き生きと遊びこめるようになるのではないかと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　遊びの意義

幼児の遊びとは何か。幼児にとって遊びはどのような意義をもつのだろうか。

1　遊びとは

幼児期の遊びは，幼児が自分から興味や関心をもって環境に主体的・意欲的にかかわり，心や身体を働かせて活動をつくり出し展開する働きの全体を指しているものである。

幼児は遊ぶことを通して達成感・挫折感・葛藤・充実感を味わうなど，様々な体験を重ねながら心身の調和のとれた発達の基礎を身につけていく。つまり，自発的な活動としての遊びは幼児期の重要な学習なのである。（幼稚園教育指導書）

遊びとは幼児が主体的・意欲的に自分の周りのものにかかわり，自分なりに取り入れ，自分の思いや考えなどを言葉や動作・行動などで表していくものであり，幼児の自発性を大事にしなけ　ならない。

2　遊び　分類

遊び　分類は，観点の相違から学者の分類も一様ではないが，社会学的見地から分類したものとして次のような種類があげられる（M．D．パーテンによる分類）

(1)　何もしていない行動……ぶらぶらとしていような行動。

(2)　ひとり遊び……　……ひとり遊びを楽しんでいる。

(3)　傍観者的行動……他の子どもの遊びに関心はあるが，実際は加わらない。

(4)　平行的な遊び……一緒にいることを楽しむが，個々別々の遊びを行っている。

(5)　連合的な遊び……２人ないしは３人以上で一つのことをして遊ぶようになる。

(6)　共同的あるいは組織的な遊び…役割が分かれて遊ぶようになる集団遊び。

3　遊びの中から育つもの

遊びは子どもの生活を充実させ，子どもの成長発達に欠かすことのできないものである。子どもたちは，遊びの中から様々なことを学び生きる力を身につけていく。遊びの中から培われるものはどういうものがあるだろうか。

(1)　身体の器官や運動能力を発達させる。

(2)　意欲・積極性・自主性を高める。

(3)　知的好奇心・創造性の芽生えを培う。

(4)　イメージを広げ，表現力を養う。

(5)　自己統制やルール意識・道徳心を養う。

(6)　仲間関係を広げ，深める。

(7)　経験を広げ，知識・技能を身につける。

(8)　緊張・ストレスを解消する。

（盛岡市教育研究所平成元年度研究紀要より引用）

これらのことは，幼児が主体的・自発的に遊びを通して学びとっていくことであり，幼児自身が環境とかかわるなかで生まれ出てくるものである。

4　戸外遊びで育つもの

戸外には，室内では体験できない遊びの広がりがある。戸外には，幼児の興味や意欲をかきたてる自然や空間がある。戸外での遊びには幼児の健全な成長発達にとって大切なものが含まれている。

戸外での遊びを通し，幼児に次の事が育っていくと考える。

自然との触れ合いの中から

・身近な小動物とのかかわりで，喜びや哀しみ，思いやりややさしさが育ち，生命の尊さを学ぶ。
・植物を見たり育てたりすることで自然の営みの不思議さ，収穫や開花の期待や喜びなどを味わう。
・砂・土・水など自然の素材との触れ合いは，情緒の安定を図り，試したり，確かめたりすることでイメージが広がり創造性が培われる。
・季節の変化や自然事象を肌で感じることができ，感受性が育つ。

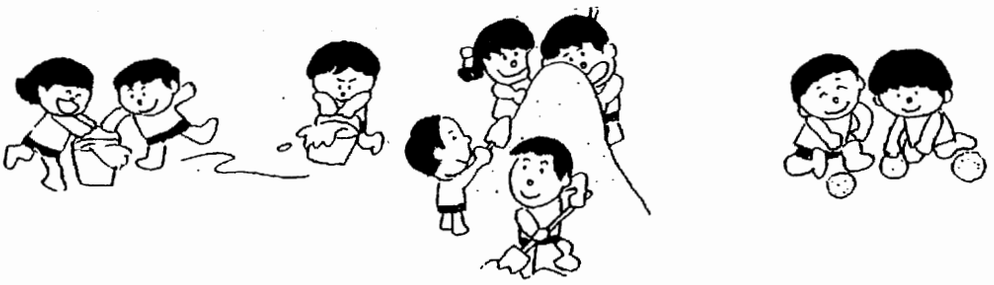
みんなが集まる場の中で

・自然に他のクラスとの交流が生まれ，友だち関係が広がり社会性が育つ。
・他のクラスの教師とも触れ合うことができ，教師・幼児共に仲間意識が育つ。

固定遊具やその他の遊具，空間を活用することで

・全身を使っての遊びを楽しむことで心身の発達を促す。
・物にかかわり，物を生かして遊びが広がる。

戸外遊びを通し，幼児は様々なことを体験し成長していく。幼児の成長発達を促すには，幼児が戸外で主体的に環境にかかわり遊びこむことが重要だと考える。



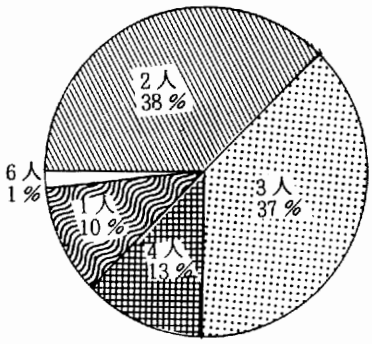
Ⅲ　調査研究

＜家庭における幼児の遊びの実態調査＞

この調査は，幼児をとりまく環境や家庭での遊びについて調査し，実態を捉えることで指導の課題をみつけ，幼児の遊びが充実していくための援助を探る基礎資料とするために実施した。

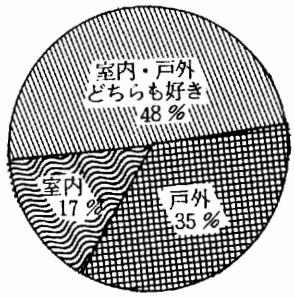
※調査期間　5月2日～9日　回収率92%　※1と3は全体の比較，その他は男女の比較

1　きょうだいの数

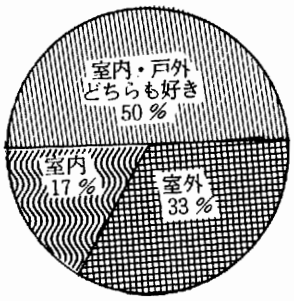


2　どこで遊ぶか

男児



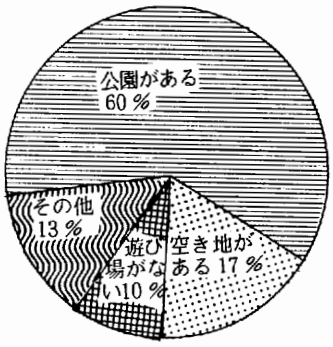
女児



・ひとりっ子，二人きょうだい合わせると48%である。社会的現象である少子化傾向が本園にも表れていると言えよう。

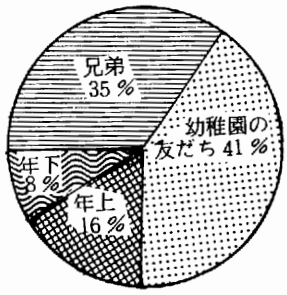
・室内，戸外どちらも好きとの回答が男児48%，女児50%とあまり差がない。この項目では男女差が見られないが，遊びの内容は違いがあるようだ。

3　遊べる場所があるか

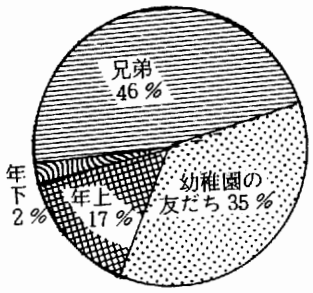


4　遊ぶ相手

男児



女児



・近くに公園や空き地があり，遊べる環境のある割合が77%と高い。

・その他の13%にはアパートの駐車場で遊ぶとの回答があり安全に伸び伸びと遊べない状況が窺える。

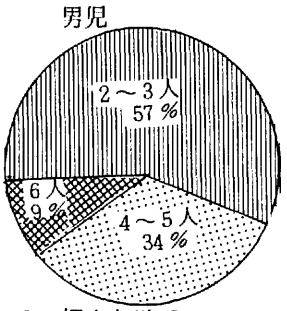
・男児は幼稚園の友だちと遊んでいる子が多いが，保育園で一緒だった子や近所の幼稚園児と遊んでいるようだ。その後，幼稚園でできた友だちとの交流が広がり幼稚園の友だちと遊ぶ割合も増えていると思われる。

地域の公園（調査書より）

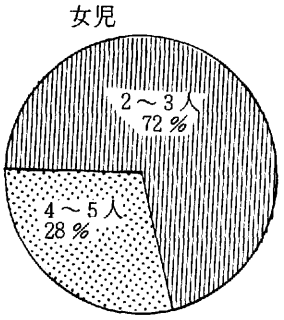
勢理客小公園，むつき公園，ゆうな公園，後原児童公園，宮仲公園，神森団地内の公園

5　遊ぶ人数

男児



女児

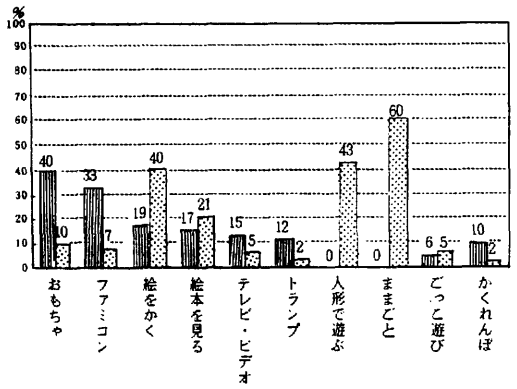


・男女共，本人を含め２～３人の子とのかかわりが多く，少人数での遊びになっている。

・男児は４～５人で遊ぶ子と６人以上で遊ぶ子を合わせると43％になっている。遊ぶ人数が多くなると遊びも動的になりダイナミックな遊びになると思われる。

6　好きな遊び

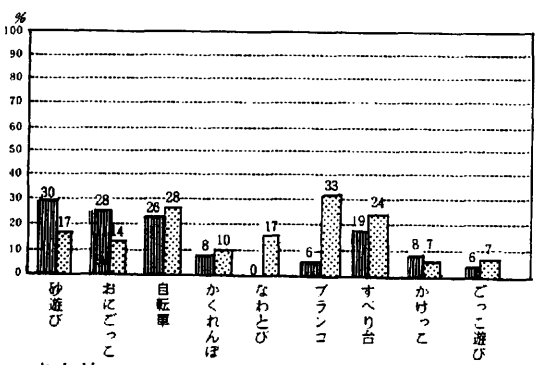
(1)　室内での遊び　　男児▥　女児▨



・男児と女児では遊びの傾向に違いが表れている。男児の上位のおもちゃ（ブロック），女児の上位のままごと遊びは，幼稚園でも見られる好きな遊びである。

・ファミコンの数値は男児が高く，男女の興味の違いが表れている。それは，ゲームの内容が戦闘的なものが多く，女児はあまり興味を示さないためだと思われる。

(2)　戸外での遊び



男児の戸外遊びのNo.１は砂遊びになっている。また，女児も好きな遊びとして砂遊びがあがっており，自然の素材である砂が幼児にとって魅力のある素材であることを改めて認識した。

まとめ

遊びの実態調査を実施したことで，家庭での子どもたちの遊びの傾向や生活環境を知ることができた。

○　戸外ではブランコやすべり台，室内ではおもちゃ・ブロック・ままごとなど既成の物を介しての遊びが多く，自然（草花・木の葉・木の実・虫・小動物など）と触れ合う遊びが見られないので幼稚園では幼児が自然と触れ合える体験ができる環境づくりをし，感性を育てていきたい。

○　家庭で室内遊びの好きな子は幼稚園でも室内での遊びが多く，家庭での遊びの状況が園の生活にも表れている。幼稚園では幼児が育ってきた過程を大事に受け止めながら，幼児が戸外の環境に目が向くような環境の工夫をし，幼児の世界を広げていきたい。

Ⅳ　幼児が生き生きと遊びこむための教師の援助

幼児が生き生きと遊びこむためには，幼児自ら環境に働きかけて発達に必要なものを獲得しようとする意欲や生活を営む態度，そこで培われる豊かな心を育てることである。それらの心情・意欲・態度が育つためには幼児が幼児期にふさわしい生活を営み，発達に必要な体験を得るための教師の援助が必要となってくる。

幼児が生き生きと遊びこんでいる姿とは

- 幼児自ら喜びを感じて活動に取り組んでいるとき。
- 自己を出しきって遊んでいるとき。
- 満足，成功感が得られ，自信を持つことができたとき。
- 友達関係が充実しているとき。
- 困難にぶつかり，葛藤を乗り越えたとき。
- できたこと，やったこと，考えたことが教師や友だちに認められたとき。

幼児が生き生きと遊びこむための援助の手立て

1　教師の姿勢

- 園の教育目標を念頭におき保育にあたる。
- 一人ひとりの特性を受け止め愛情を持って接する。（まなざし）
- 全教師で全園児を育てる。
  各教師がかかわった幼児の姿を伝達し合い，話し合い教師全員で共に幼児を育てていく。
- 幼児の自主性と発想を大事に見守り，必要なときに援助する。
- 一人ひとりの記録を大切にし，日々の保育の反省をし，明日の保育へつなげていくようにする。

2　教師の援助

(1)　幼児を理解する。

①　幼児の発達する姿を生活を通して的確に捉える。

どのような生活を幼児は展開しているか，その中で幼児の興味や関心はどのように広げられたり深められたりしているのか，友だち関係はどうなっているのかを教師は幼児と共に生活する中からていねいに受け止めていくことが大切である。

②　一人ひとりの幼児の特性や発達の課題を理解する。

同じ環境の下で生活していても，一人ひとり環境の受けとめ方は異なり，かかわりかたも違ってくる。一人ひとりの特性や発達の課題に応じて援助しなければならない。

発達する姿は幼児と共に生活することで幼児の視点からみたり，幼児の発見や感動を共有したりしながら幼児の興味や関心，心の動きを感じとっていこうとすることでみえてくる。幼児を理解することからねらいが明確になり，環境，援助のあり方も見い出せる。

(2) 信頼関係を築く。

家庭で母親や家族との間で培われてきている基盤を大切に受け止め，認めたり，共感したり，励ましたり，愛情を持って接することで，幼児は教師に対して心を開き信頼を持つようになる。幼児は教師との信頼の基盤に立ち，主体性を十分に発揮して生き生きと遊びこむようになる。

(3) 環境を構成する。

幼児の発達の実状や幼児の生活する姿を十分に踏まえて，具体的なねらいを達成する方向に向かって必要な体験を得られるような環境をつくり出していくことは教師の重要な役割である。

環境構成の配慮

・幼児の発達を促す環境構成をする。

幼児が試したり，考えたり，工夫したりできる環境構成。

・幼児が意欲的・主体的に環境にかかわり，変化できる環境構成。

幼児と教師が共に生活しながらつくり変えていく。（環境の再構成）

(4) 直接的な援助

幼児のより望ましい成長発達を促すために次の具体的な援助を心がけたい。

・遊びを見守る。
・一緒に遊び共感する。（仲間の一人として遊びに参加する）
・工夫や発見を認める。
・遊びが停滞しているとき，遊びを方向づけ発展できるよう援助する。
・問題にぶつかったとき，一緒に考え方向性を探る。
・活動がうまくできなくて困っているときは一緒に考えたり，手助けをする。
・探求心や知的好奇心を満たしたり，刺激したりする情報を提供する。
・ゆさぶる。
・環境の再構成を幼児と一緒にする。
・没頭して遊ぶ時間を十分に保障する。
・安全点検をする。
・適切な評価をする。

V 環境の見直し（遊びが育つ環境の工夫）

1 園庭の環境の見直し

幼児が様々な活動をするためには，働きかける環境が必要である。園の環境が幼児にとってかかわりたくなるような環境・遊びが生まれる環境になっているか見直し，環境の工夫を試みた。

【平成２年度】

(1) 固定遊具の移動

砂場の前に遊動木があり，遊具の出し入れがやりにくく，遊びの動線に無理があったので

遊動木を移動する。ブランコ，鉄棒，すべり台も取り組みやすいように配置を変えた。すべり台はガジュマルの側に配置し連続して遊べるようにした。

〔すべり台からガジュマルへ忍者になって渡り，枝にロープをつり下げて降りたり，すべり台から木の実を取ったり，遊びに広がりがみられるようになった。〕

(2) 土山の設置

自然の素材の土に触れ，土の感触を味わって欲しいとの願いから土山を設置する。

〔設置直後はスコップで掘ったり，クワを持ち出して耕したりなど遊びの発展がみられなかったが，雨上りのほどよい状態の土とくぼみにたまった水が刺激となり，土だんご作り，コーヒー作り，川作りが始まり土との触れ合いを楽しむ姿がみられるようになった。〕

【平成３年度】

(1) 保育室の移動

これまで２階に３クラスが配置されていたが，室内，室外に遊びが分散すると教師が幼児の遊びを把握するのが困難である。保育室を１階へ移動することで，室内遊び，戸外遊びが互いに刺激となり，遊びが広がるようになるのではないかと考え，２クラスを１階へ移動した。

〔室内でブロックで遊んでいるＫ男，ブロックを組み立て窓の方に近づく。外で水遊びをしているのに気づく。「ぼくも遊ぶ－」と，一緒にブロックで遊んでいたＴ男を誘い外へ出た。〕

(2) 電線ドラムの家の設置

木登りをしたり，枝にロープをつるしてターザンごっこをしたり，ガジュマルの実で遊んだり，砂のケーキの飾りやお金になったり，ガジュマルはいろいろな遊びを子どもたちに提供している。

そのガジュマルに囲まれた所へ子どもたちが入って遊べる電線ドラムの家を２軒置く。この家を拠点に遊びが広がらないかと期待する。

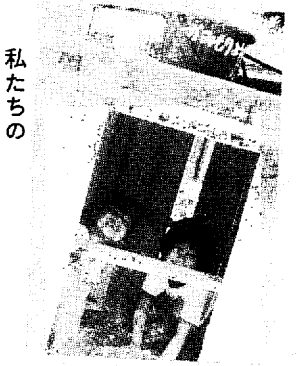
〔教師の予想では，家の中での遊びがみられると思っていたが，家が低く座っての活動に制限されるせいか，屋根の上での遊びが多くみられる。家の中では，うさぎの家ごっこ，砂遊び，上では，ままごと，色水遊び，ガジュマルの枝につり下げてあるロープに飛びついたり，屋根に上がる為に踏み台になる箱やタイヤを探してきたり，いろいろな遊びが生まれてきた。〕

(3) 遊べる草花を育てる

おじぎ草やジュズダマ，色水遊びに使えるマツバボタンなどを植え，触れたり，摘んで遊んだりできるようにした。

〔４月の下旬，おじぎ草をみつけたＳ子，「さわってごらん」と教師。Ｓ子恐そる恐そる手を出すが「恐い」と引っこめてしまう。Ｓ子おじぎ草との初めての出会いである。〕

2　幼稚園環境構成図

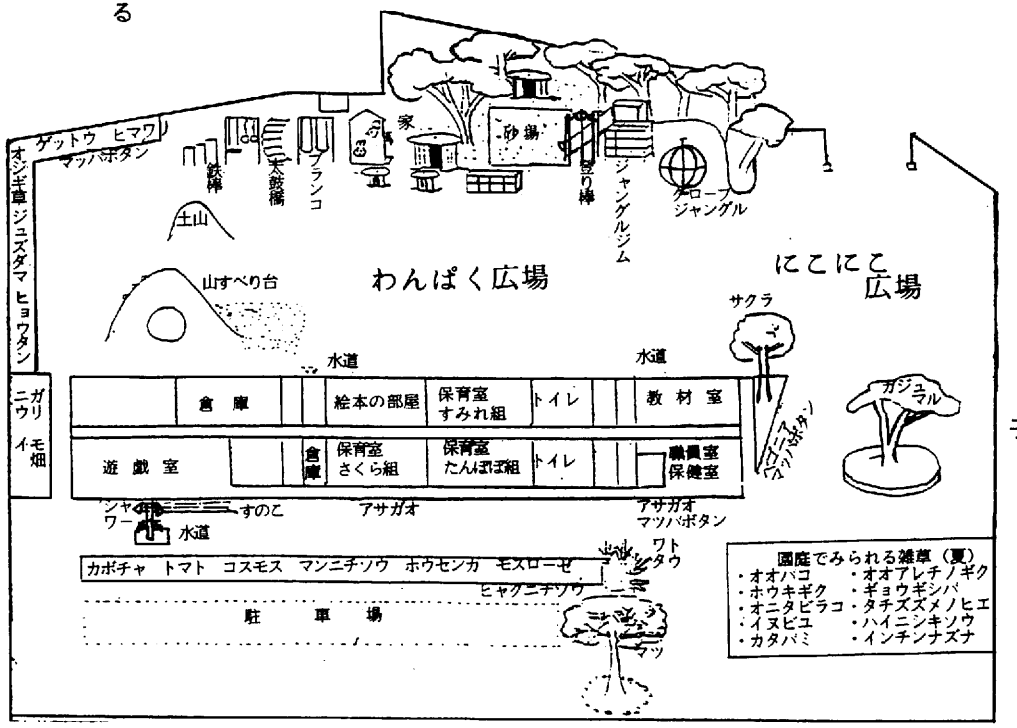


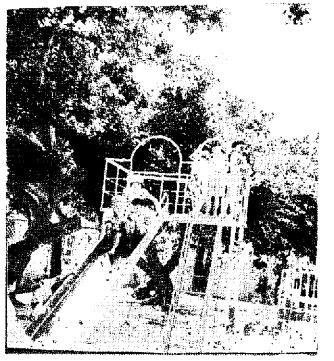
私たちの
セメント工場へようこそ

ガジュマルは
みんなの友だち
いっぱい遊んでくれる

ガジュマルの葉っぱで
なにをするのかな

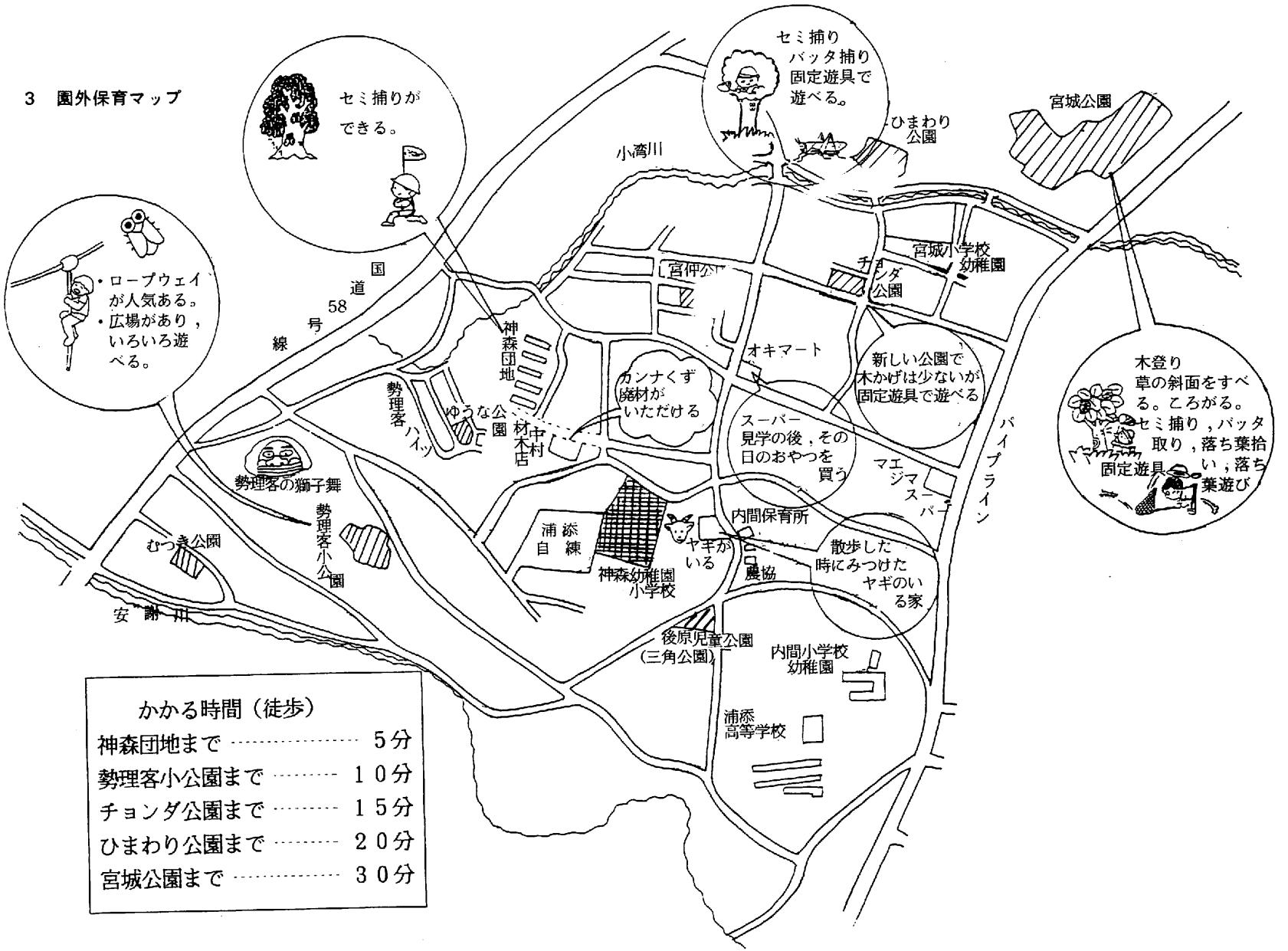
山すべり台
みんな大好き





子うさぎはみんなのアイドル
いつだって一緒

3　園外保育マップ



かかる時間（徒歩）

神森団地まで	5分
勢理客小公園まで	10分
チョンダ公園まで	15分
ひまわり公園まで	20分
宮城公園まで	30分

Ⅵ 保育実践

1 事例研究（自己充実した姿を求めて）

(1) ＜友だちに受け入れられないN子＞

① N子の背景

・父，母，兄（20才），姉（19才），兄（15才），本人

・保育歴なし

・大人の中に本児一人が幼い子である。家庭ではひとり遊びや母親相手の遊びで同年令の子とのかかわりがない。

② クラスでの様子

・入園当初は静かに友だちの遊びを見ていることが多い。教師が遊びに誘うと拒否する。

・家庭訪問で，教師が自分の家へ来たことが嬉しかったらしく，家庭訪問をきっかけにN子から話かけるようになった。

・園の生活に慣れてきた5月，近所に住んでいるH子と友だちになりたいという思いが出てきたが，自分から声をかけられず，H子の姿を追っている。H子はすでに仲良しの子がおりN子を相手にしない。

③ N子の援助の手だて

◎教師とN子の信頼関係を築く。

・N子に一人ぼっちだという意識を持たせないように語りかけ，N子が教師を求めている時は対応できるようにする。

・無理にH子とのつながりを持たせず，N子の行動を見守る。

月	N子の様子	教師の援助
五月	・H子が何をしているのかが絶えず気になりH子の姿を追っている。 「先生，H子ちゃんがいない」 「先生，H子ちゃんは？」 「先生，H子ちゃんがまだお集まりしていない。探して来る。」	・H子と友だちになりたいという思いは叶えてやりたいが，無理に仲を取り持っても友だち関係は成立しないので様子を見守ることにする。
	・常にH子のことが気になり，姿が見えないと「先生，H子ちゃん知らない？」と聞く。 （H子は明るく活発。仲良しのI子，E子と楽しそうに遊ぶ姿がみられる。）	・N子はH子を見ていることでH子と同化し安定しているので一緒にH子を探す。
	・友だちの遊びを見ていることの多いN子だが一人ままごとコーナーで遊んでいる。皿にブロックのごちそうを入れ，楽しそうな表情である。	・園庭からN子の遊びを見守る。 目が合ったのでVサインを送り，教師がいつもN子を見守っていることを知らせる。

五月	・H子とI子が，ガジュマルの木の下の家の中で砂に水を加えセメント作りをしている。N子２人の為に水を運んでいる。I子「N子，もっと水汲んできて」N子水を入れに行く。N子は２人の手伝いをしることで自分の存在を認めてもらいたいようだが，H子，I子にとってN子は命令すればなんでもやる存在としての認められ方である。 しばらくして（教師）「H子ちゃんたちと遊んでいたね。楽しかった？」N子「うん」とほほえむ。	・N子が２人の為に水を運んでいるけなげな姿に胸が痛んだが，N子にとって友だちとつながりが持てたことが嬉しいようなので見守る。 ・抱きしめながらH子たちと一緒にいられた喜びをN子と共に共感する。
六月	H子以外の子に目を向け始める。 ・朝，カメの水の取り替えを近くにいたR子とN子に頼んだ。２人は協力し合ってカメの水を取り替えてくれた。教師としては近くにいた子に頼んだのだが，N子にとっては他の子に目が向くきっかけになったようだ。 ・翌朝，「先生，R子は？」N子から初めてH子以外の名前が出てきた。 ・それ以来，N子とR子の遊ぶ姿がみられるようになる。登園すると２人誘い合い園庭へ遊びに行くようになる。 ・（教師）「N子ちゃん，R子さんとお友だちになったの？」N子「うん」（教師）「よかったね。R子さんといっぱい遊んでね」N子，ニコニコして「うん」とうなずく。	・教師のなにげない一言が他の子とかかわるきっかけになった。 ・R子が登園するのをN子と一緒に待つ。 ・一緒に遊べる友だちができたことを共に喜び，N子の思いを受け止める。

＜考察＞

◎　N子とH子は友だちにはなれなかったが，H子たちの楽しそうに遊ぶ様子が刺激となりN子はH子たちの様に遊びたいと思うようになった。環境としての，幼児の果たす役割の大きさを知った。

◎　７月に入り，N子とR子にY子が加わり遊ぶようになった。N子の表情は生き生きしている。友だち関係の充実が幼稚園の生活を楽しいものにしていき，遊びの充実へとつながっていくと思われる。

(2) ＜次々と遊びが変わるＵ男＞

① Ｕ男の背景

・父，母，本児，弟

・保育歴１年間

・保育園での集団生活の経験はあるが，園庭のない保育園での室内での遊びがほとんどであった。家庭では幼稚園入園までは母親も働いており，保育園から帰ると父親の店へ連れていき店の中で遊んでいた。

② 園での様子

・遊ぶことには意欲的で，やりたい遊びがあると飛びつくが，長く続かず次々と遊びが変わる。

・遊びに入ると自分本位でトラブルが多い。

③ Ｕ男の援助の手だて

・Ｕ男の遊びを見守り，どうして遊びが続かないのか，どうしてトラブルが起きるのか内面理解に努める。

・Ｕ男の良いところを認め，他の子の気持ちに気づかせる。

月	Ｕ男の様子	教師の援助
四月	・入園当初は，ブロックをしているかと思うと園庭で山すべり台，次はグローブジャングルと次々遊びが変わるが表情は生き生きしている。	・Ｕ男の遊んでいる様子を見守り，楽しそうな様子を認める。
	・Ａ男がブロックで何か作っている。そこへＵ男がやってきて「オレも作ろう」とＡ男の持っているブロックを取る。Ａ男「あっ，これだめ」Ｕ男「なんでー，オレ作るのに」Ａ男「先生，Ｕ男が僕の作っているのこわしよった」教師が行ってみると，Ｕ男は別の遊びに移行している。	・他の子の遊びに興味を示し，遊びに入っていくが，思い通りにならないと次の遊びを求めている。トラブルをおこしながら「アレッ，変だな」と気づき始めているので見守り，乱暴な行動がみられたときには話し合う。
五月	・園庭へ出たＵ男，プールを見つけすぐに飛び込む。プールの中に入っていたホースで近くにいる子に水をかけ喜ぶ。教師に注意されるとプールから出，水鉄砲を取りに行き，うさぎやにわとりに水をかけている。	・水遊びの準備をしていない子に水をかけてはいけないことは分かったが，友だちにはダメだが，うさぎやにわとりにはかけてもいいと解釈したようだ。うさぎは水に弱いことを話す。
	・Ｕ男の乱暴な行動に他児が抗議すると，殴ったり蹴ったりするので苦情を言う子が多くな	・お互いの気持ちを出し合う中からＵ男の行動が他の子に不快を与えているこ

五月	る。 ・「U男が殴りよった」「U男がなんにもしないのにこわしよった」U男に聞いてみると，「なんでー，オレのブロック足りなかったのにー」「あれたちが悪口言うのに」	とが少しずつ理解できてきたようだ。U男の言い分も受け止め，自分勝手なことをしていては楽しく遊べないことをじっくり話し合う。
六月	・これまで自分の好きな遊びに一方的にかかわっていたU男だが，友だちと一緒に遊びたいという気持ちをもつようになった。衝動的な行動はまだみられるが「U男に借して」「U[illegible]やりたい」など，友だちとかかわるため，自分の欲求を押さえることが少しずつできるようになった。 ・友だちができる。 H君と砂場で山作りをしている。砂を運んだり，水を運ん[illegible]けたり楽しそうである。 砂遊びから色水遊び，色水遊びからしゃぼん玉，遊びは変わっていくが，一つの遊びに取り組む時間が長くなっている。 ・降園前，「先生，早く終ってー，H君と帰るから」と友だちのことを気にかけている。 ・友だちを求めるようになったことで，相手のことを気づかうようになり，U男に対する苦情も少なくなる。	・U男の変化を喜び，見守る。 ・「U君，借してって言えたね。えらいね」と変容を認める。 ・自分の欲求のままに行動していたU男が友だちと一緒に遊んでいる。一つの遊びを協力し合ってすすめている。U男の生き生きしている表情を捉える。 ・「そうだね，お友だち帰っちゃったら困るね」とU男に同意し，U男の思いに応える。

＜考察＞

◎　U男の遊びが転々としていたのは集中力がないからではなく，新しい環境に興味を持ち，環境を積極的に取り込もうとする意欲の表れであり，U男なりの充実を求めている姿だと思われる。

◎　自分が楽しければいいという自分の本位であったU男が，トラブルをおこしながら周りの子の存在に気づき，友だちを求めるようになったことで，場を共有する仲間としての意識が芽生えて，周りの子のことも理解できるようになっている。U子の成長していく姿に幼児の育つ力，育ち合う力をみることができた。

青い小麦粉粘土をつくろう！

2　実践例

保　育　指　導　案

期日　平成３年６月20日（木）
対象　すみれ組，たんぽぽ組，さくら組
　　男児56名，女児47名，計103名

(1)　主な活動　　・園庭で遊ぼう
(2)　ね　ら　い　　・友だちとかかわりながら遊びを楽しむ
(3)　幼児の姿

入園して２カ月が過ぎ，子どもたちは幼稚園の生活にも慣れ，友だち同士誘いあって遊んだり一緒に遊びたい子が登園するのを待っていたり，友だちとの遊びを楽しむようになっている。

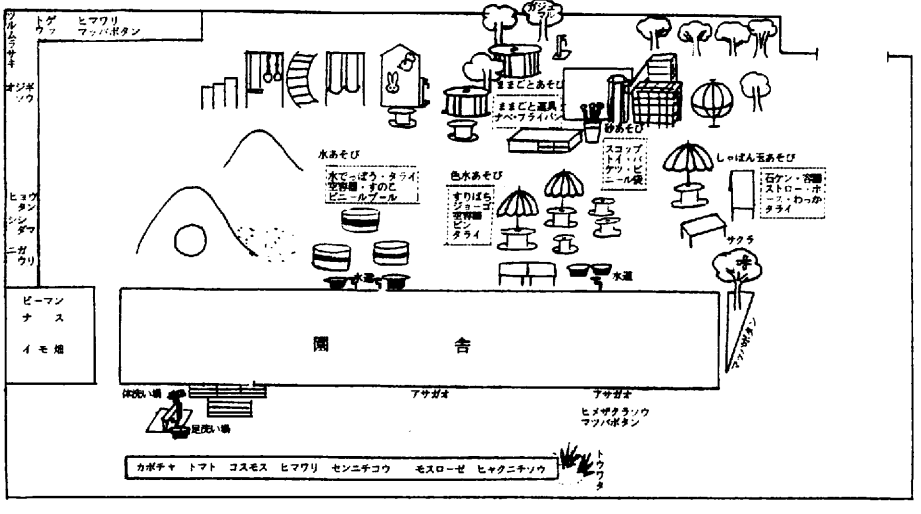
園庭ではうさぎの赤ちゃんが子どもたちと遊べるようになったので，うさぎと遊ぶのを楽しみに登園して来る子も多い。毎日うさぎと触れ合う中から，うさぎの抱き方を気をつけたり，草を取ってきたり，慈しみやいたわりの心が育ちつつある。

６月に入り，マツバボタンやモスローゼを使っての色水遊び・水遊び・石ケン遊び・土山での川作り等の遊びが出てきた。

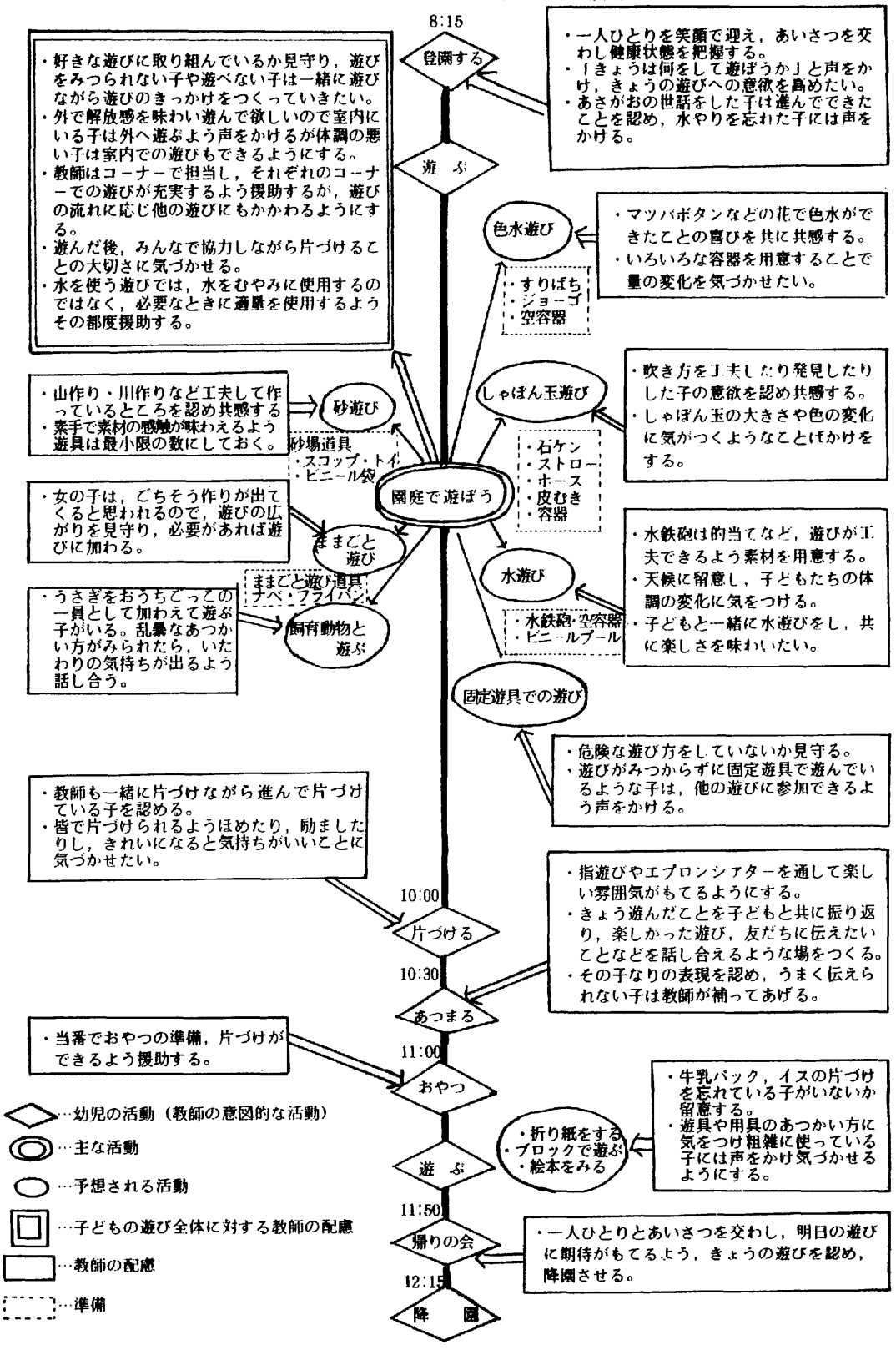
水遊びでは，水の感触を楽しみ，泥んこになっても気にせずに楽しそうに遊んでいる子。「汚い」「気持ち悪い」と遊びに加わらない子。遊びたいがどう遊んでいいかわからない子と，水に対する反応も様々だが，クラス全員で水遊びを経験したり，生き生きと遊ぶ友だちの姿に刺激を受け，徐々に水への抵抗が取り除かれていった。

本時は，継続している遊びの環境を構成し，好きな遊びに取り組めるようにしたい。教師も幼児と共に遊び，遊びから生まれる気づき・発見・工夫・つまずき・喜びなどを大切に捉え，共感したい。

(4)　環境構成図



(5) 予想される幼児の活動と教師の援助



(6) 展開例

事例①＜Ｉ君，友だちができてよかったね＞

友だちと遊べず，友だちの遊んでいるのをみていることの多いＩ君が，ともだちとのかかわりをもちだした。

Ｉ　男　の　姿	教師の援助と思い　援助　思い
教師と数名の子が山を作っているのをＩ男が見ているのに気がつく。 Ｔ「Ｉ君，一緒に山作ろう。おいで」	いつも友だちの遊んでいるのを見ているＩ男。遊べるきっかけをつくってあげたい。声をかけてみよう。
Ｉ男，首を横に振って笑っている。砂場の周囲を歩き，立ち止まって山作りをみている。	遊びに入れないＩ男に無理な要求をしたことを反省。一対一でかかわりをもってみる。
山作りの場を離れ，Ｉ男のほうへいく。 Ｔ「Ｉ君にご馳走しようね」砂の型抜きをして Ｔ「はい，どうぞ，ケーキを食べて下さい」	
Ｉ男，はにかみながら食べる真似をしている。	Ｉ男に受けいられホットする。
Ｔ　「おいしかった？」 Ｉ男「うん」　ニコッと笑う。	
Ｉ男，教師の作った砂のケーキを食べると砂場を離れていった。	山作りをみていたＩ男に声をかけたことで，Ｉ男の居場所を奪ったのではないかと不安になる。
Ｉ男，色水遊びで使っているプリンのカップをみつけ，砂場にもどって来た。座り込み，砂場のふちに型抜きを並べ始めた。	Ｉ男が遊びをみつけ，無心にあそんでいる。Ｉ男が自ら遊びに取り組めたことを認め，遊びを見守る。
Ｔ「おいしそうなプリンだね。いっぱいできたね」	しばらく遊びをみていたが，型抜きがたくさんできたことを認めてあげたいと思い声をかける。

I男，型抜きをしている手を止め，教師と目が合うと嬉しそうに笑う。	
T「先生，食べたいな。これ下さい。いくらですか」 I男，小首をかしげ考え I男「100円」 T「はい，100円」	一緒にプリンの売り買いを楽しみ，遊ぶ楽しさを共有する。
テレたような笑みを浮かべお金を受け取る。	
T「Iさんの作ったプリンおいしい！もっと食べようかな。これ下さい。いくら？」 I男「500円」	
I男，お金を受け　と座り，型抜きを始めた。	かかわりをもたせることにせっかちになったことを反省する。 遊びを見守る。
型抜きで砂場のふちがいっぱいになったので場所を移動して型抜きを続けている。	
I男，黙々と型抜きを続け次々並べている。そこへ，しゃぼん玉遊びを終えたK男が通りかかりI男の遊んでいるのをみていたが，プリンの空き容器を探して来て，I男と共に型抜きをやり出した。	型抜きしたプリンが増えていくのが楽しそう。
砂場のふちがいっぱいになると地面に二人で並べている。何を話しているのか聞こえないが，楽しそうな雰囲気が伝わってくる。	地面に型抜きを次々に並べている二人の姿をみて，「友だちと一緒にいるって楽しいな」というI男の喜びが伝わってきた。よかったねI君。

＜考察＞

◎　I男が砂の型抜きに興味を示し遊び出したことがK男とかかわるきっかけになった。自分を出して遊べるようになったI男，友だちと一緒にいる楽しさ，共に遊ぶ喜びを味わうことが，できたと思われる。

◎　遊びが遊びを刺激し，遊びが育ち，友だちとのかかわりも育ってくる。教師は一人ひとりの特性を大事にし，安心して自己を出せるよう援助していくことが大切だと考える。

事例②<しゃぼん玉>

昨日からモールの輪でしゃぼん玉を作る子が出てきたのでモールで遊び出す子が多い。いろいろな素材で試したり，工夫したり，遊びを楽しんでいる。

〔　〕教師の援助

モールを使って

・しゃぼん液からそっと輪を持ち上げ
「虫めがねだよ」「探偵だよ」
教師「どれどれ」とのぞきこむ。
すると，風が吹いてきてしゃぼん玉ができた。
「なんにもしてないのにしゃぼん玉ができたよ」

〔遊びを見守り幼児の思いを受け止める。〕

・輪にできた膜にしゃぼん液が落ちてしまった。
「不思議・不思議」「実験みたい」
「水だと破れるよ」「違うよ」
教師「実験したら」
「いいよ，どうせ破れるから」

アッ　消えちゃった

真剣なまなざしでみつめている

手でもできるよ

・洗面器の中で石ケンを泡立てしゃぼん液を作り，手のひらをこすり合わせ，そっと手のひらを離し膜ができるまで何度も繰り返している。
「魔法みたい」「手品みたい
「ハンドパワーだ」
教師「本当だ！すごいね」
真剣な表情でしゃぼん玉作りが続く。

〔遊びに参加する。〕

〔共感する。〕

そーっと吹くんだよ

こうするとできるよ

・教師がわざと息を短く，強く吹いていると　〔ゆさぶりをかける〕
「ゆっくり吹くんだよ，ゆっくり。ゆっくり吹くと大きくできるんだよ。」
教師「アッそうか，やってみようね。うまくできるかな」　〔気づきを認める〕
教えられたようにゆっくり吹いてみる。
教師「本当だー。ゆっくり吹くとできるんだね」　〔共感する〕
教師に教えてあげたことで満足そう。

＜考察＞

◎　モールの輪についた膜や，手のひらをこすり合わせてつくるしゃぼん玉遊びから，イメージが湧きいろいろなつぶやきが生まれてきた。しゃぼん玉遊びを通して繰り返し遊ぶ中で，風の動きや膜を作るための工夫などいろいろなことを学んでいる。

◎　モールの輪でしゃぼん玉ができるまで何度も繰り返している姿に，しゃぼん玉ができたときの瞳の輝きに，遊びに没頭し自己充実している姿がみられた。

(7)　反省と考察

○　しゃぼん玉遊びでは，モールの輪を二つ重ねて輪と輪の間に膜ができることを発見し，何度も膜ができるまで挑戦したり，輪でしゃぼん玉ができるまで根気強くやったり，長時間集中して遊んでいる子が４人いた。たっぷりと遊びこむための時間を保障してあげたことが，遊びを深めたと思われる。

○　色水遊びでは，しおれた花が需要をまかないきれず花探しに時間がかかっていた。花以外の葉やその他の素材でも色水ができることに気づかせ，色水遊びが継続していくようにしたい。

○　色水を作り「ジュースだよ，先生飲む？」花を何種類か混ぜ「ぐじゃぐじゃジュースだよ」と個々にジュースをイメージしているが，まだ色水を作ることを楽しんでいる。今後色水遊びが継続していくことで，ジュース屋さんへ発展していくのではないかと期待する。

○　水遊びで，きょうから的当てがみられた。最初ヤクルトの容器を１個ずつ水鉄砲で当てて倒していたが，１個・２個と積み上げたり，距離を考えて水鉄砲を飛ばしたり，意欲的に遊んでいる。

○　日頃乱暴であまのじゃく的な態度をとるＳ君だが，Ｈ子が教師に「ガジュマルの実取って」と頼んだのでＳ男に「Ｓ男君，Ｈ子さんがガジュマルの実取って欲しいんだって。取ってあげて」と声をかけてみた。どんな返事が返ってくるかと待っていると「うん」とすなおな返事が返ってきた。木に登り木の実を取っているＳ男，「はい」と木の実を差し出すＳ男。これまで知らなかったＳ男のすなおな面を知ることができた。このすなおさが友だちとのかかわりにつながるように援助していきたい。

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 遊びの実態調査を通して，幼児の家庭での生活，遊びを捉えることができた。その幼児の実態から，幼児が戸外で遊ぶ体験をすることが重要であることを確認でき，援助を考える手だてになった。

(2) 抽出児U男の姿から，幼児が環境にかかわっていく過程を捉えることができた。幼児が物にかかわり，人にかかわり，相手を認識し，そして自己を認識するようになり成長発達していく。それが遊びの充実へとつながっていくと思われる。U男の発達する姿を通し，教師は幼児の遊びを見極める力をつけなければならないことを実感し，発達を理解することの難しさを痛感した。

(3) 環境の工夫（電線ドラムの家）が，子どもたちの発想を誘発し，様々な遊びが生まれた。幼児の興味・関心を引き出す環境の工夫の大切さと，環境を自分たちのものにしていくためにエネルギーを発揮し遊ぶ幼児のたくましさを学んだ。

2 今後の課題

(1) 幼児の遊びの理解，内面理解に努め，より遊びが充実していくような援助の工夫をしていきたい。

・子どもがみえる記録の工夫。

・家庭との連携を密にし，教師と保護者の共通理解の下で一人ひとりの幼児を育てる。

(2) 今回の研究を足掛かりに，更に子どもが育つ環境の工夫，草花と触れ合える園庭の自然環境の充実を図っていきたい。

おわりに

実り多い研修の機会を与えて下さった浦添市教育委員会，温かく見守り指導して下さった宮城久子先生はじめ指導主事の先生方，励まし支えて下さった研究所の方々，研究員の皆様，励ましの言葉をかけて下さった幼稚園の先生方，共に研究をすすめてくれた神森幼稚園の皆様に心から感謝申し上げます。

主な参考文献

文部省	幼稚園教育指導書増補版	フレーベル館	1989年
高杉自子野村睦子　監修	新幼稚園教育要領を読みとるために	ひかりのくに	1989年
日本幼年教育研究会	新幼稚園教育要領の内容と解説	明治図書刊	1989年
吉美豊　編著	子どもは風の子　自然の子	ひかりのくに	1990年
小川博久　編集責任者	4～5歳児の遊びが育つ	フレーベル館	1990年
西久保礼造	保育実践用語辞典	ぎょうせい	1990年
盛岡市教育研究所	研究紀要　336		1989年
全国国公立幼稚園教育研究協議会　宮崎大会保育指導案			1990年
那覇市立教育研究所	研究報告書（紀要201号）		1989年